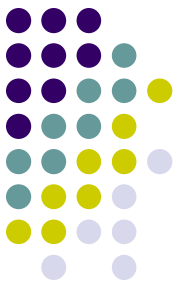


大学図書館職員の スキルアップ法

鈴木 正紀
(文教大学越谷図書館)

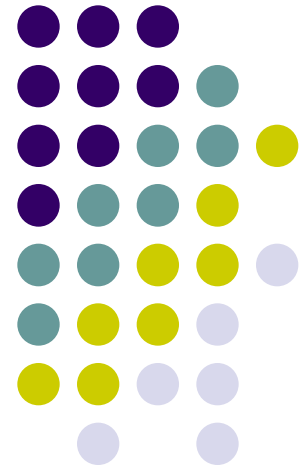


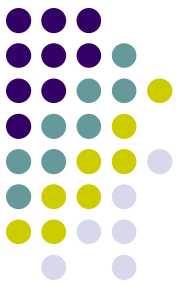


本日のおはなし

1. 自分(たち)の置かれた立場を確認してみる(今, どういう状態にある? どうなっていく?)
 - スキルアップを考えるときに抑えておくべきこと
2. 大学図書館員にはどういった能力が求められているのか?
 - 同じく, どうすればいいのかは, これがわかっていないと先に進めない
3. 「仕事ができる図書館員」になるために
4. まとめ

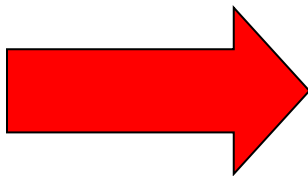
1. 自分(たち)の置かれた立場を 確認してみる



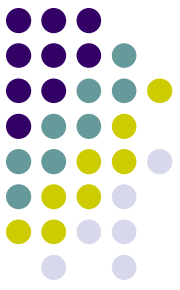


大学

1. 国立大学→国立大学法人（国立大学法人法：2004年）
2. 公立大学→公立大学法人（地方独立行政法人法：2004年）
※設置する自治体の判断で可能となった
3. 私立大学→学校法人（私立学校法：1949年）



「法人」という立場は共通に

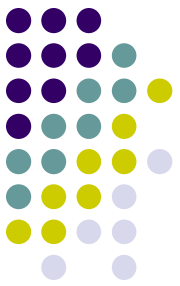


「法人」とは何か

- 自然人以外のもので、法律上の権利義務の主体とされるもの。一定の目的のために結合した人の集団や財産について権利能力(法人格)が認められる。(デジタル大辞泉)
 - 一定のルールに則って、自らの理念・希望等を実現するための団体。
 - 結社の自由:起こすも潰すも自分たち次第

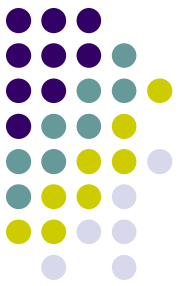
国公立がそれぞれの枠を超え、法人単位でさまざまな連携を進めている

社会



1. (よくも悪しくも)「自己責任」社会
 - 自己決定権の「拡大」(努力と運)
 - 「標準」というものの衰退(あるいは崩壊)
 - 社会のセーフティネット(生活保護・年金・保険, 地域社会など)がボロボロ
 - 自分の人生設計は自分でする(「エスカレーター」はなくなった)
2. (高度)情報化社会(ネットワーク社会)
 - インターネットが一般化したのは, たかだか10余年前。今はこれがないと仕事にならない(ウソみたい)

社会



3. グローバリズムの進展

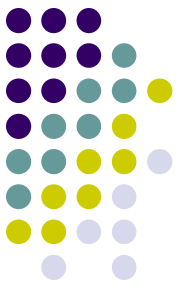
- ひずみが噴出(格差, 社会的階層の固定化(弱者の拡大再生産)など), どう是正されていくのか

ex.若年層の「貧困化」=将来の日本の「貧困化」の誘因

4. 人口減少社会

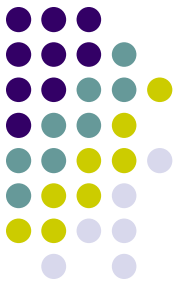
- 少子化・(超)高齢化社会
 - 私立大学の定員割れは私学全体の47% 国公立大は？
 - 高齢者が必要とする社会的コストの負担は？
- 人口が増えることは, (政策を変えない限りは)ありえない

etc



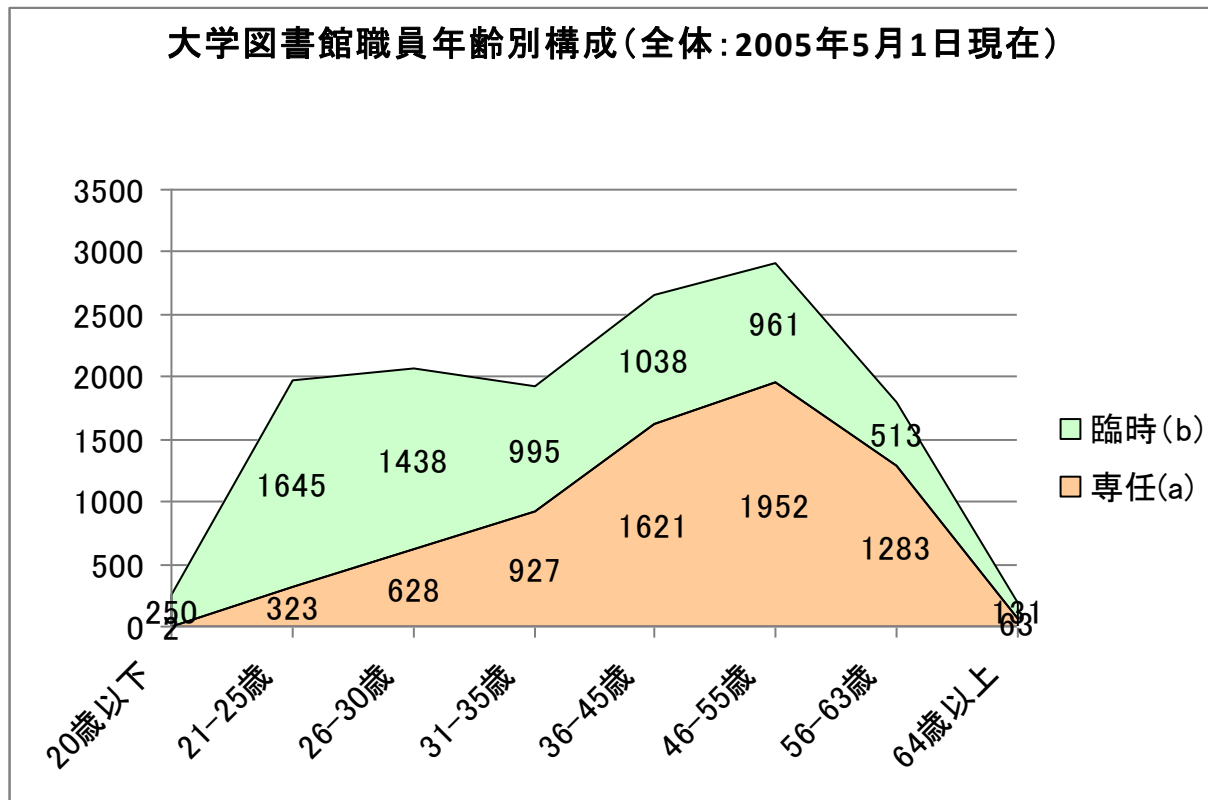
そこで働く図書館員

1. 法人の職員（社員）
2. 図書館員という独立した職業人 という2つの顔を持つ
→ 組織人であること（大学コミュニティの一員であること）／（自立した）個人（職業人）であること
 - 図書館員にとって必要な知識・スキルは、こうした2つの側面を持つということを反映したものとなってきた



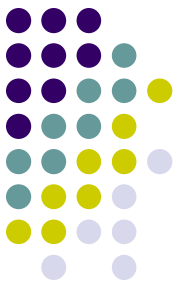
大学図書館界

1. 「専任職員」はどういった状態におかれるようになるのか。



注:業務委託
スタッフはここ
には入っていない

文部科学省「平成17年度学術情報基盤実態調査」より



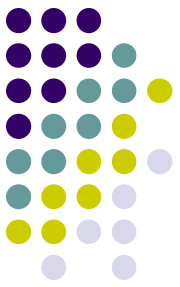
大学図書館界

2. 図書館組織は？

- 専任職員の割合の(おそらくは)大幅な減少によって「やるべき業務」は変わってくる
- それに対応して、組織も現在のものとは異なったありようとなることが予想される
- 大学図書館界を支える組織はどうなるのか？

3. 自分の在職年数はあと何年？

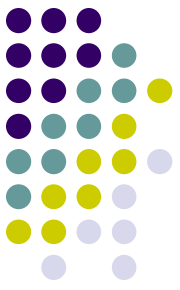
- 在職中の課題
- その後の課題
 - 自分がいなくなっても図書館が持続的成長を遂げるには



何を考えるべきか

- 「スキルアップ」を考える際，起こりうる環境変化と，その中で何が求められているかを考える必要がある。

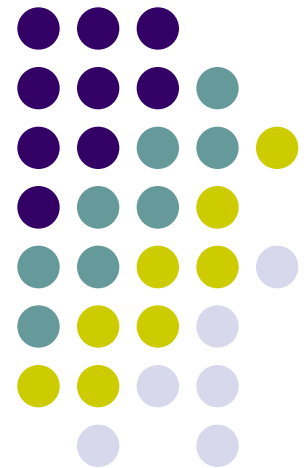
【基本文献】「今後の『大学像』の在り方に関する調査研究（図書館）報告書－教育と情報の基盤としての図書館」筑波大学（2007年3月）[文部科学省『先導的大学改革推進委託事業』]



何を考えるべきか

- 「本調査研究のねらいは、大学がその使命を果たすために必要な図書館・情報基盤がどのようにあったらよいかを見極めることである。そのねらいは、このような状況において、大学コミュニティに価値をもたらす図書館・情報基盤の在り方を探ることであるとあってよい。……／まず、「**大学図書館をめぐる状況**」(第1章)を把握した上で、「**図書館の位置**」を確認して、二つの課題、「**学生の学習と図書館**」(第2章)と「**情報資源管理の方向性**」(第3章)をとらえ、さらに今後「**サービス展開の方向性**」(第4章)と、それを支える「**図書館の組織と人的資源**」(第5章)の問題を論じた。本文の理解を助けるために、それぞれ章ごとに、実例や調査結果を含むトレンドをつけた。」(「はじめに」より)

2. 大学図書館員にはどういった能力が求められているのか？





LIPERから得られた知見

- LIPER: 情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究 (2003年度-2005年度) *
- 英国図書館・情報専門家協会 (CILIP) の「専門職知識の体系」(BPK : Body of Professional Knowledge)「情報専門職を特徴づける知識ベースを、中核的な知識・技術だけでなくそれらと一体になって機能する知識・技術を含みこんで、同心円の三層で示している」(永田)

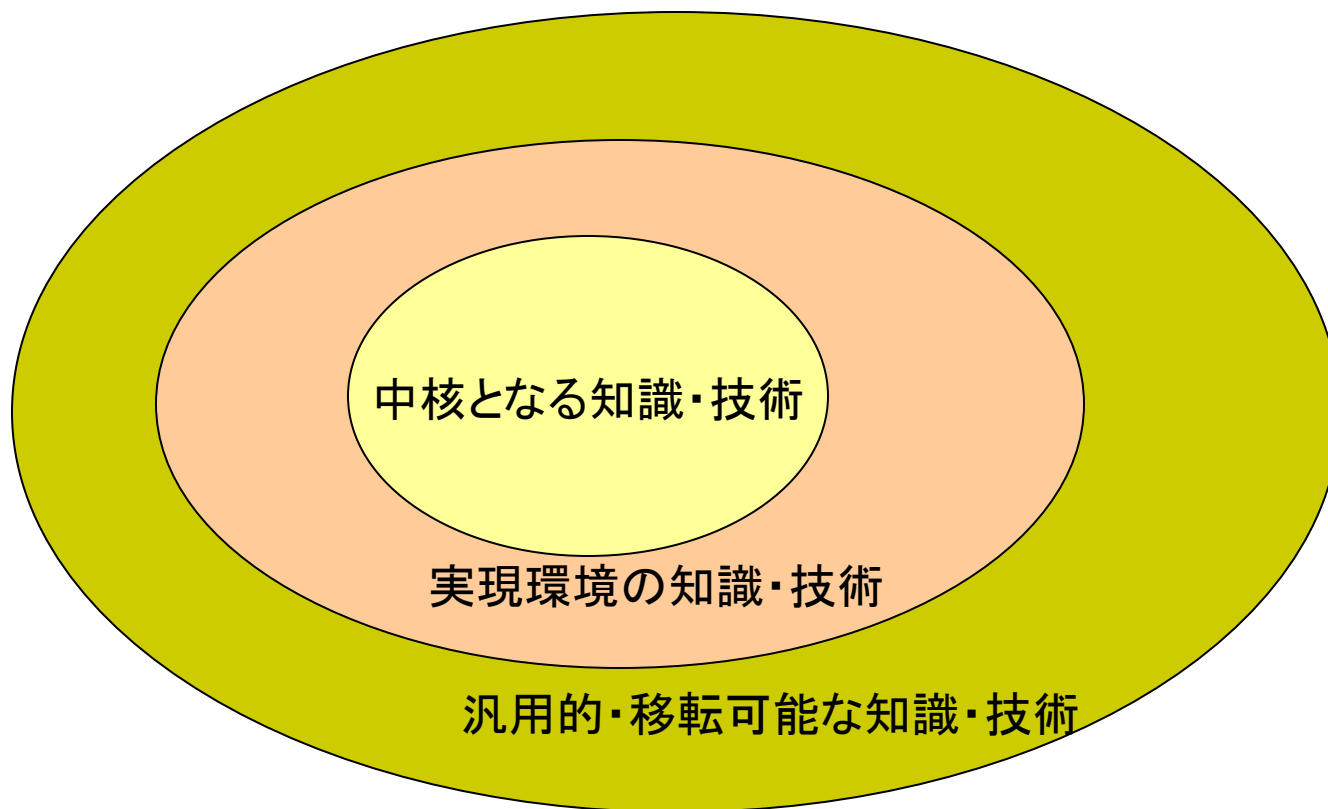
Body of Professional Knowledge



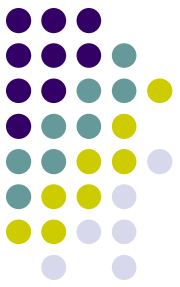
- 中核となる知識・技術 (Core Schema)
- 実現環境の知識・技術 (Applications Environment)
- 汎用的・移転可能な知識・技術 (Generic and Transferable Skills)

*

BPKの同心円的三層構造



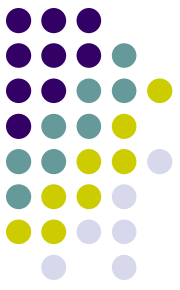
大学図書館員に必要な知識・技術の体系



● 中核となる知識・技術領域

1. **既存サービス**(二次資料・参考図書、資料目録法・オンライン目録システム、参考調査サービス、情報検索技術、図書館・文献利用教育、閲覧・貸出サービス)
2. **図書と図書館**(古典籍、資料保存、メディアの歴史、障害者サービス、図書館建築、図書館史、書誌学)
3. **新しいサービス**(ネットワーク情報資源、逐次刊行物、電子ジャーナル、官庁刊行物・特許資料、その他の非図書資料および利用機器、ドキュメントデリバリーサービス、図書館業務システムの運用、管理)
4. **資料組織化**(メタデータ、分類法・件名法、索引法、抄録法、二次資料/DB作成)
5. **コレクション形成**(分野別専門資料、資料選択、コレクション構築と評価、主題専門知識)

大学図書館員に必要な知識・技術の体系(続き)



● 実現環境の知識・技術領域

1. 図書館の基準やネットワーク(知的財産権・著作権、図書館ネットワーク・図書館協力、利用者のプライバシー、図書館関係法規・基準)
2. 情報・出版流通(知的自由・検閲、外国大学図書館事情、出版流通/学術情報流通、高等教育事情)

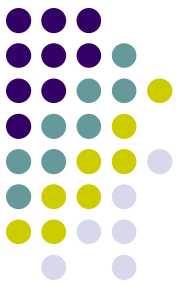
大学図書館員に必要な知識・技術の体系(続き)



● 汎用的・移転可能な知識・技術領域

1. コミュニケーション(カスタマケア、広報活動、ウェブコンテンツの構築・管理、プレゼンテーション技術、文書・企画書の作成、会話・接遇、研究調査法、利用教育などにおける教授法)
2. 情報技術(データベース等の運用・管理、ネットワークの運用・管理、プログラミング)
3. 経営管理(経営理論・手法、大学行財政、予算管理・会計)
4. 外国語(英語、英語以外)

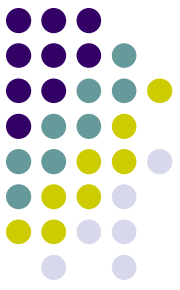
■ 出典:永田治樹「大学図書館における情報専門職の知識・技術の体系:LIPER大学図書館調査から」図書館雑誌, 99(11), 2005, 774-776.



「求められる人材像」(国大図協)

- 『大学図書館が求める人材像についてー大学図書館職員のコピテンシー(検討資料)』(2007年3月)
 - 国立大学図書館協会人材委員会が提示する「求められる人材像」
 - 必要とされる能力・知識・スキルを, 職層とクロスさせて描いている

国大図協ウェブサイト > 人材委員会



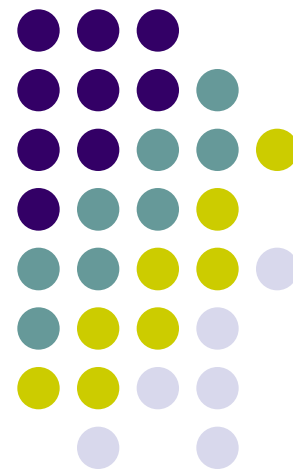
自分が働く組織はどうなるか？

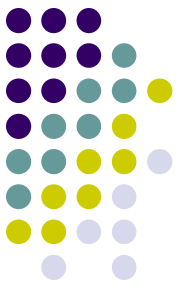
- 専任職員の極端な減少，業務委託が進む，業務の機械化・コンテンツの電子化（学術情報流通の環境が変わる）・サービスの電子化（ウェブ化）が進む中で
 1. 専任職員が行なう業務／派遣・非専任スタッフが行なう業務 → 明確な区分が必要となる
 2. 業務管理システムの進化によって，これまで人間が行っていた業務は業務管理システムに置き換えられる（ex.貸出）
 3. 従来の業務組織は見直しを迫られる
 4. 情報リテラシー教育への参画 → しかしガイダンスやるならそれも委託可能
 5. リエゾン・ライブラリアン，企画，図書館経営が最後のよりどころ？



というようなことを前提に、
スキルアップについて考えてみる

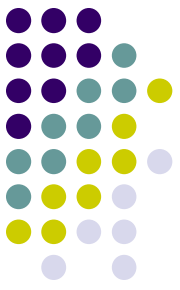
3. 「仕事ができる」大学図書館員 になるために





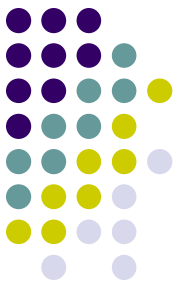
「プロ」とは？

- 「…仕事は一生懸命やっても、職場に埋没しないことです。プロというのは基本的に一匹オオカミです。もちろん、チームプレーは大切ですが、それはプロ同士としてのチームプレーであるべきです。本当のプロは自分の職業に誇りと強い倫理観をもっています。しっかりとした個人としての立場を持つことで、自立した人生を過ごすこともできるのです。」岡本和久
(毎日新聞 2008/9/28朝刊 12版 17面)



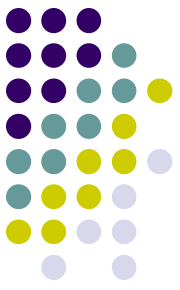
[1]新たな情報を常に取り込む姿勢を持つ

- 外の世界に関心を向ける，人とのネットワーク—**設置母体を超えた関係，業種を超えた関係**—を作る
 - (あえていいます)職場に閉じこもったらその人の成長は止まる
 - 人材が「人罪」に(逆ベクトルとしての「人財」)
 - 「最初はだれでも光っているが・・・」
 - 職場に希望を見出しえないならばなおさら
- それによって新たな知見・経験を得る



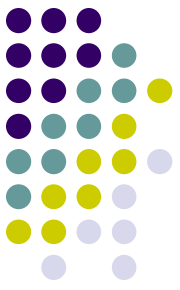
[1]新たな情報を常に取り込む姿勢を持つ

- **学会(研究団体), 職能団体への加入と活動への参加:** 日本図書館情報学会, 情報メディア学会, 日本図書館研究会, 情報科学技術協会, [大学図書館問題研究会](#), [図書館サービス計画研究所](#) (略称:トサケン), [NPO法人大学図書館支援機構](#), 日本図書館協会, 日本出版学会, [高等教育問題研究会\(FMICS\)](#) etc (個人単位で加盟することがポイント。その活動を「肌で感じる」)
- **メールマガジンの購読:** 図書館のこと, 学術情報流通に関すること, 学術活動に関すること, 高等教育に関すること(お勧め: 日本図書館協会メルマガ, Current Awareness-E, ACADEMIC RESOURCE GUIDE: ARG, 大学関連ニュース(放送出版プランニングセンター), 関連企業が発行しているもの(ユサコ:ユサコニューメディアニュース, サンメディア:e-Port world Flash など)



[1]新たな情報を常に取り込む姿勢を持つ

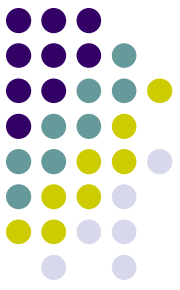
- **メーリングリストへの参加**（発言できればなおよい：**発言しない**と**情報は入ってこない**）：オープンなものとは会員限定のもの
【参考】『大学の図書館』18(5), 1999 [特集：図書館員のためのメーリングリスト入門]
- RSSを利用した情報収集 (Ex.カレントアウェアネス-R)
- 有用なウェブサイトのチェック
「[図書館員のためのインターネット](#)」*
「[カレントアウェアネス・ポータル](#)」*
- 図書館を数多く見る（国内外，館種を問わず）



[2]研修会・講習会への参加

- 具体例は一昨年の講義資料を参考に *
- デジタル・ライブラリアン講習会 *
- 情報科学技術協会 (INFOSTA) *
- **企業セミナー**は情報サービスの最新動向を知る
とってもいいチャンス
 - 企業の人間は(おそらく)一般の図書館員よりも情報サービスの先端動向を把握してい

大学図書館界の制度的研修は体系化されているとはい
いがたい:国大図協の取り組みに期待! m(_ _)m)



[2]研修会・講習会への参加

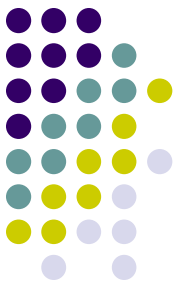
- 研修会，講習会へは名刺を忘れない
 - もらった名刺はしっかり管理を(いつ，どこでもらったか，など)
 - 管理ツール(Outlookなど)
- 相手(講師，主催者，参加者)に名前と顔を覚えてもらう
 - まわりまわって，なにかがまわってくる

自分自身を「売り」に出す→スキルアップに必要な情報は，こうしたところからも入ってくる



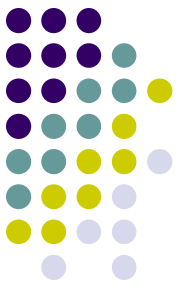
[3]海外研修

- 近年ようやく整備されてきた（国立大学図書館協会，私立大学図書館協会）
 - 機会があれば行かない手はない！
- 職場に海外研修制度はないか？



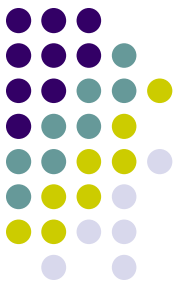
[4]資格取得

- 情報系資格, 語学関係資格 経営関係 等 → スキル向上の目標となりうる
 - ただし, 情報系は, 資格を取ってもその知識はすぐに陳腐化してしまう)



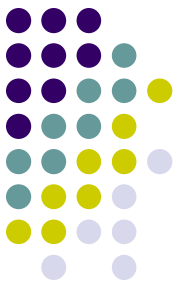
[5]大学院での研究

- 筑波大学, 慶應義塾大学, 愛知淑徳大学, 大阪市立大学 …
- 図書館情報学分野でなければならないということはない
 - 図書館情報学に関する知見を深める
 - 研究活動がいかなるものであるかを実体験する場
 - (もしかしたら)異分野のほうがいいかもしれない, とも…
- 海外の大学院での研究 【参考】「情報の科学と技術」52(7), 2002 [特集:海外の図書館情報学教育に学ぶ]北米の図書館情報学科で学んだ体験記を掲載



[6]自分ひとりでもできる日常的努力の例

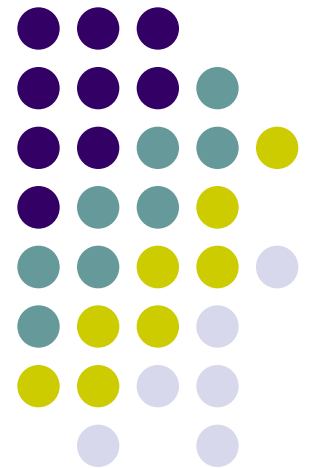
- 篠原俊夫「一日，ワン・アーティクルのすすめ」
『大学の図書館』15(8), p.133(1996.8)
- 参考になるサイト
 - College & Research Library News
<http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/crlnews/collegeresearch.cfm>
ALA > “Division”のACRL > Publication

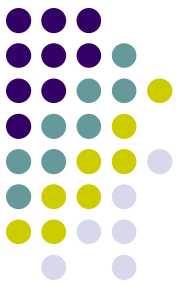


[7]「書く力」をつける(=表現力)

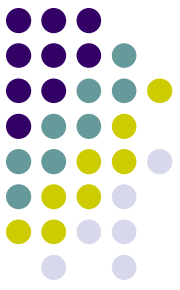
- 職場での仕事上のドキュメント
 - 職場で自分がしたいことを理解してもらうための素材
 - 成否は表現次第(俗にいう「プレゼンテーション能力」)
 - 管理的な立場に立った時, 作文能力(と説得力)が, 組織の成否を左右するかもしれない
- 書くことは, 自分の考えを整理し, 次の段階に進むきっかけをつかむこと
 - 場数を踏むことでしか得られない経験(「恥」は大いにかくべき)
 - 書き続けるしかない & そのコツを身につける
 - 寄稿の依頼は断らない, という姿勢(自分はそんなあ...では, ここで終わり)

4. まとめ

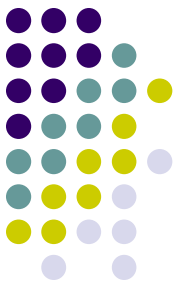




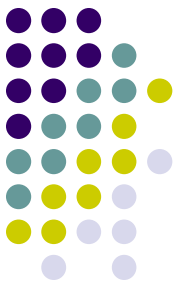
- スキルアップするには、まず本人の意欲・意思がなければありえない。その意味でスキルアップのための活動は、自助を基本とするものである。
 - それを基本に、職場や関係団体が提供する組織的（制度的）研修，研修に対する補助制度を活用する。
- 「刺激」が大事（本人の意欲・意思を揺さぶる）
- 職場での相互啓発は大切
 - 情報交換，お互いの切磋琢磨
 - 職場での研修活動
 - 出張の報告会
 - DB操作法，プレゼン法 等



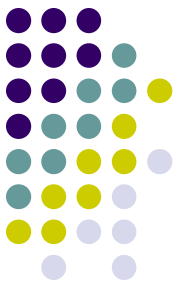
- それぞれの人が自分に関するキャリアデザイン(ただし思い通りにいかどうかはわからない)を柔軟に持ち続けること：自分は大学図書館で働くことで何をしたいのか？(ある種のフィロソフィー, 自分の職業生活を支える力, ミッションに対する自覚
→ 仕事に対する意欲, スキルアップの努力は, これがあってこそそのもの)



- 図書館員の仕事は裁量の幅が広い(楽をしようとすればそれなりに楽はできる(= 「図書館って楽でしょ」のイメージは, おそらくこうしたところから醸成される)し, いい仕事をしようとすればおそらく際限はない(= 下手をするバーンアウト)
- 職業人としての生活は長い。調子のいいときもあれば落ち込むときもある。そうした長い時間のモチベーションを支えるものは何か。(ときどき必要となる「原点回帰」) * 落ち込んだ時はそれでいい



- 長い時間の中で環境は変化する。その変化に対応できるように。
「生き残るのは強いものではない。生き残るのは環境の変化に適応するものである。」(ダーウィン)
- コンティンジェンシー理論：環境適応理論。あらゆる経営環境に対して有効な唯一最善の経営組織は存在しないとして、経営環境が異なれば有効な経営組織は異なるという立場をとる理論。(デジタル大辞泉)



- 「話せて書ける図書館員」になる！
 - 糸賀雅児「『話せて書ける』図書館司書を！」図書館雑誌91(4), 1997, 236-240
- ワーク・ライフ・バランスを大切に
 - 図書館のことしかできない人間にならないように
 - また、病気になっては元も子もありません
 - 働く環境を良くするための努力を！